

# 猿留山道



北海道えりも町 猿留山道（さるるさんどう）

## 歴史

猿留山道は、北海道南部太平洋から襟裳岬がせり上がり日高山脈につづく山懷、「日高山脈襟裳国定公園」に位置しています。

北海道が蝦夷地と呼ばれていた時代、この地はアイヌの暮らす大地でした。1700年代末になると、ロシアなどの外国船が、ラッコの毛皮、クジラの脂、食料や水、交易を求めて来航、択捉島や国後島などに上陸、アイヌと交易し、時に争いが起こりました。

江戸幕府は蝦夷地の北方警備が重点課題であると判断し、陸路の整備に着手しました。当時、通信や移動手段は、大きな帆を掲げてすすむ「北前船」が主だったため、海が荒れた日や風向きが逆な気象だと何日も足止めとなり、急務の情報をより速く松前や江戸に伝えることが難しかったのです。



猿留山道を旅する様子（「北海道歴史検図」版大）



幕府は危険な海岸線であるえりも～広尾間の通行を迅速にするため、幌泉（現：えりも町字本町）～庶野山中～猿留（現：字目黒）間に七里半（約30km）の山道を、寛政十一年（1799）蝦夷地における官製道路の最初の一つとして、様似山道と共に開削しました。

全国を測量した伊能忠敬が寛政十二年（1800）に測量して歩き、北海道の名づけ親といわれる松浦武四郎も弘化二年（1845）～安政五年（1858）にかけて三度、猿留山道を旅しています。



現在の風景

## 江戸時代の様子

目賀田帯刀が安政六年頃（1859）に描いた「北海道歴検図」（北海道大学附属図書館蔵）には、猿留山道の道半ば、アフツ小休所から見た百人浜・襟裳岬の風景（左上絵図）が描かれ、今も江戸時代と同じ風景（上写真）を楽しむことができます。



絵図（左・左下絵図）には、武上を先導するアイヌ、騎乗する武士、荷を運ぶ馬の一行等が描かれ、当時の様子を知らることができます。

## 沼見峠

山道には沼見峠があり、カムイトウ（豊似湖）を望むことができます。江戸時代建立の「妙見菩薩」（安政六年1859）と「馬頭観世音菩薩」（文久元年1861）があり、旅の安全と地域の発展が願われています。

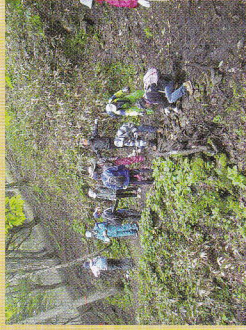


沼見峠の石碑

## 整備と活用



測量の様子



ボランティアによる修復作業

えりも町では、平成9年からボランティアによる猿留山道の調査と復元がすすめられ、平成21年にはえりも町文化財に指定し、保存活用に取り組みできました。

平成27年度は史跡（国指定）に向け測量調査を実施しました。

## 歩く時の注意

猿留山道は日高山脈の山中、落葉広葉樹林帯を通っています。一般に歩くことができる時期は、融雪後の5月中旬から積雪前の12月上旬です。

一帯はヒグマの生息地です。クマよけ鈴の携行等ヒグマ対策が必要です。マダニ、カバキコマチグモ、スズメバチ、マムシ、ウルシ等の危険生物がいますので、帽子、長そで等、服装にも注意してください。

山道ですので、はきなれた登山靴、地図、コンパス、非常食、防寒服等の準備、滑落、落石、枯損木の落下等に注意し、自己責任での歩行をお願いいたします。

動植物等の採取は厳禁、ごみの持ち帰り等マナーを守り、安全に楽しくご利用ください。

携帯電話はほぼ全線で通信できません。

えりも町郷土資料館 01466-2-2410  
058-0203 北海道えりも町字新浜207  
E-mail: erimomus@cocoa.ocn.ne.jp  
休館日：火曜日、祝日の翌日、年末年始  
発行：えりも町教育委員会（2016.03.）